

関係発達論の視点から見た 「育てるものの育ち」を支える フォーカシングの可能性

—ペアレンティング・フォーカシングの 提案とその実践—

国際文化研究科 国際文化専攻
臨床心理学研究分野 博士前期課程
2025年3月修了

野上 雅貴

主査 森川 友子 副査 命婦 恭子 小林 純子

研究背景

関係発達論では、人の育ちを「育てるもの一育てられるもの」の相互的なやり取りの中で両者ともが一生涯に亘り変容していく過程を捉えようとしている。鯨岡は現象学的立場を基盤とし、「子どもからおとなへ」ではなく「育てられるものから育てるものへ」という観点から、その関係性の中に生じる心的力動を描いてきた。関係発達論によって捉えられる養育者の間主観性や主体性を支えるうえで、フォーカシングにおける間主観的で相互主体的な関係性に着目し、論考及び介入を通してその可能性について検討した。

研究目的

これまで関係発達論の視点は心理療法に組み込まれておらず、養育者に対して養育者一子ども関係に焦点を当ててフォーカシングを行う実践やその意義に関する研究は行われていない。そこで本研究では、第一に、関係発達論における間主観性や主体性について、フォーカシングがどのように寄与しうるかを論考し、第二に、実際に子育て中の養育者に対してフォーカシングの介入を行い、その実施可能性やプロセスの特徴を検討することを目的とする。

研究概要

第一研究において、関係発達論とフォーカシングについてその交点について論考した。論考から、自身の身体感覚に注意を向けるということや知的な水準から離れて「右脳の」な状態に退行するということは、間主観性の基盤になっていること、様々な両義性の中で脱当体的主体性(主体が子どもの欲求に準拠する状態)の中であっても、体験に開かれているということが、鯨岡(2016)のいう「自分が自分らしく生きながら共に生きる」主体の感覚を育むであろうことが示唆された。

第二研究において、二名の養育者の方を対象に行った計五回ずつのセッションを記述、考察した。その結果、母親という役割の中で感じにくくなっていた本来の幸福観や子育てに対するネガティブな感覚といった主体としての感覚や、自身の育てられた体験と重なる世代間の同一化の問題に触れる機会となることが示された。セッションの中でそれらに適度な体験的距離の中で触れることは、脱当体的主体性を強いられる中であっても養育者が主体の感覚を持つことを支えることが示唆された。

成果・まとめ

「育てるもの一育てられるもの」の間にみられる間主観的で相互主体的な原初的コミュニケーションは、論考や事例を通して、フォーカシングにおける「リスナーーフォーカサー」の間においても生じている現象であると考察された。育てるものの間主観的で主体的なかわりが、育てられるもののそれを育むのであれば、そのような育てるものの育ちはフォーカシングにおける関係性の中で支え、育むことが可能であろう。



指導教員コメント

野上さんは、親子の滑らかな感応に、身体に根差す心理療法が寄与するであろうという感覚から、関係発達論と脳科学、フォーカシングという三領域の交点で、学際的な論文を作成しました。養育者の方々へのフォーカシングでは、養育者と、支援する野上さんとの間に右脳の感応が生じたと考えられるセッションがあったとのことで、興味深い現象です。人と人とが右同士でつながっている関係性の世界について、今後研究を進めていかれることを期待しています。

森川 友子